

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. 20

2022.7

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

CONTENTS

特集 走ろう！巡ろう！北海道！

01 自転車を活かしたまちづくり

- サイクリストを呼び込み地域活性化につなげる(増毛町)
- サイクリスト目線の環境整備で人を呼び込む(石狩市)

05 地域が動く・プロジェクト最前線

- 北見市 地元出身IT人材が帰ってくる場所
先端技術と大自然が混ざり合う『オホーツクバレー』の実現を目指して

07 「なおみちカフェ」から ～地域創生のヒントを探る～

- 知事が訪問した地域で活躍されている方々を紹介するコーナー
- 空知編 雨煙別小学校 コカ・コーラ環境ハウス
 - 根室編 有限会社 別海町酪農研修牧場

09 「つながる。HUBest」 [北海道型ワーケーションの推進]

- 人と地域との新たなつながりを生み出すワーク施設とコンシェルジュを紹介
- SAPPORO Incubation Hub DRIVE 高輪健人さん(札幌市)
 - コワーキングスペースJIMBA 立川彰さん(津別町)

特集



走ろう！巡ろう！北海道！

自転車を活かしたまちづくり



社会環境の変化に伴い、自転車の果たす役割は、環境負荷の低減や健康増進、観光振興、災害時の活用など、大きく広がってきています。今回は、北海道と市町村の役割や取組状況をご紹介します。

道の取組

道では、平成29年に国で策定された「自転車活用推進計画」を踏まえ、自転車の活用及び安全な利用の促進に向け平成30年4月に「北海道自転車条例」

北海道自転車利活用推進計画で目指す3つの姿

- ① 自転車を 知る・使う
自転車の魅力を生かした多様なサイクルスタイルの実現のため、自転車の利用促進に関する普及啓発・活用の推進、自転車利用環境の整備を推進しています。
- ② 自転車を 安全・安心に
自転車を安全で安心に利用することのできる環境の構築のため、交通安全教育の推進、自転車損害賠償保険等への加入促進の強化、災害時における自転車の活用を推進しています。
- ③ 自転車を 楽しく・快適に
北海道の特性を生かしたサイクルツーリズムの推進にむけて、国内外のサイクリストの誘客、北海道の特性を生かしたサイクリング環境の創出を目指しています。



▲道路に設置された案内標識

サイクルルートマップ作成の様子



を施行し、平成31年3月「北海道自転車利活用推進計画」を策定しました。サイクリング周遊拠点整備のためのサイクルラック等の設置支援や大規模自転車道の整備、自転車の活用と安全利用を周知するためのイベントを開催するなど様々な取組を実施しています。

市町村の取組

道が策定した活用推進計画を参考に、市町村においても自転車の活用に向けた取組の実施が求められています。サイクルツーリズムによる地域活性化を図るためサイクルルートマップの作成や、快適に走行するための案内標識の整備などが進められています。

令和4年度の取組

道では、「もっと、自転車北海道。」をキャッチフレーズに定め、「環境・観光・健康」をテーマに誰もが安全・快適で楽しく自転車を活用できるように次の取組を実施します。

- ① 体験型PRイベントの開催
- ② SNS等を活用した普及啓発・情報発信
- ③ 官民連携による自転車通勤促進

- ④ 自転車を安心安全に利用するための取組
- ⑤ サイクルツーリズムの推進

最後に

周遊拠点の整備や道路の整備、サイクルルートマップの作成など、自転車で安全に快適に走れる環境を整備することで、自転車利用者の増加や道内外から訪れるサイクリストの増加に繋がるものと考えています。自転車利用者が増加すれば、環境負荷の低減や健康増進だけでなく、各地域への周遊人口・交流人口の増加も期待され、地域の活性化に繋がっていきます。北海道では、様々な取組を実施し、「環境に◎観光に◎健康に◎もっと、自転車北海道。」の実現を目指します。

次ページからは、自転車を活用したまちづくりに取り組んでいる、道内自治体を紹介します。





▲オロロンラインを走るサイクリスト

増毛町は留萌振興局管内の南部に位置し、日本海の雄冬海岸と暑寒別岳を擁する町。エビやホタテなどの海産物が豊富なことに加え、広大な果樹地帯を擁し、サクランボやリンゴなど、フルーツの里としても有名です。

また、旧増毛駅を中心に道内最古の木造校舎である旧増毛小学校を始め北海道遺産に選定された建造物も建ち並び、自然、文化、食を気軽に楽しめるコンパクトに集積された街並みとなっています。

増毛町

サイクリストを呼び込み
地域活性化につなげる

【お問い合わせ先】
商工観光課
TEL:0164-53-3332

通過するサイクリストを呼び込む

日本海岸沿いには、「オロロンライン」と呼ばれる、小樽から稚内まで約320kmも続く国道が通っています。景色が良くシーニックバイウエイに認定されていることもあり、従前から、夏場を中心に自動車やバイクと合わせてサイクリストが多く通過していると感じており、このサイクリストにぜひ当町にも立ち寄りていただき町の魅力を知ってもらおうと考え、同じ海岸沿いにある隣町の石狩市とともに「石狩北部・増毛サイクルツーリズム推進協議会」を立ち上げ、自転車を核としたまちづくりへの検討を始めました。

具体的な取組

海風を感じながらオロロンラインを走る、自然豊かな最高のロケーションを存分に満喫できる、近隣町村の田園地帯から海に繋がるサイクルルートマップの作成が行われました。

また、さらに街中に呼び込むため、歴史的建造物が建ち並ぶふると歴史通りや果樹地帯など、人気スポットが



▲国稀酒造

手近なところにコンパクトに集積されている増毛町内をぐるっと気軽に周回できるコースも作成しています。

この取組の背景には、通過するサイクリストを呼び込むことにより、留萌管内だけでなく石狩管内との周遊圏域を形成し人の交流増加につなげたいという思いがあります。

現在目標としているのが、ガイド付きサイクリングツアーの実施です。昨年度から協議会でガイドの育成を行っており、今後モニターツアーによる検証を進める予定で、最終的にはガイドツアーを、更なる人の呼び込みやツアーを通じた町の魅力の再発見まで視野に入れた取組にできよう検討しています。

さらなる可能性に向けて

増毛町の本格的な取組はまだ始まって数年ですが、自転車による地域活性化の取組を進めていくことはもとより、増毛町では「高血圧ゼロのまち」を目指し、町民の健康作りや基礎体力の増進など、健康寿命の延伸に向けた取組を実施していることから、自転車を健康づくりのためのツールの一つとして活用できると考えています。

町民にとっても観光客にとっても取り組みやすいツールである「自転車」を活かし、関係人口や交流人口の増加に繋げていきたいと考えています。

今後も更なる取組による地域活性化に期待が掛かります。



▲街中を走るサイクリスト



石狩市

サイクリスト目線の環境整備で
人呼び込む



【お問い合わせ先】
企画経済部企画課
TEL:0133-72-3193

石狩市は、札幌市の北側に隣接し、日本海、石狩川、黄金山など、雄大な自然景観に恵まれたまちです。日本海沿いの絶景を求めて高まるサイクリングニーズに応え、市では、「自転車」を活用した地域活性化に取り組んでいます。

「自転車」に着目した理由

日常の中でありふれたモノのひとつである「自転車」ですが、地域活性化のため着目した理由は、その「気軽さ」にあります。

日常生活で自転車を利用する人、サイクリング・スポーツとして自転車を



楽しむ人、両方をターゲットにした自転車の取組」を実施できたら、市内での交流人口が増加し、道の駅を含めた周遊観光の確立が図れるのではないかと、その思いから、石狩市では地域活性化に活かせないかと検討を始めました。

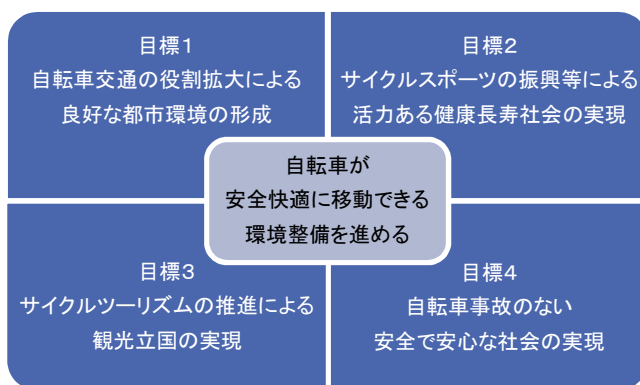
「石狩市自転車活用推進計画」の策定

自転車への注目度が徐々に高まってきている中で、まずは安全で快適に走行できる環境整備が必要だと考えました。サイクリングツアー企業である株式会社サイクリングフロンティアの石塚代表に話を伺ったり、自転車の聖地「しまなみ海道」を支えた愛媛県を参考とし検討を進めていく中で、石狩市だけではなく、国や北海道、関係団体と連携し、一体的に取り組むことと、明確なビジョンを持って進めることが必要不可欠だと判断し、計画の策定に着手しました。

そして、平成31年3月、道内市町村で初となる、自転車活用推進法に基づき「石狩市自転車活用推進計画」を策定しました。

計画の検討にあたっては協議会を設置し、国、道、前述した株式会社サイクリングフロンティアや大学教授のほか、一般公募で市民の方も構成員になっていただくことで市民の声を反映させています。

「石狩市自転車活用推進計画」の目標



石狩市の取組

石狩市では、自転車が安全で快適に走行できる環境整備を目標に掲げ、サイクリストの目線から、ハード・ソフト両面での取組を実施しています。

石狩市には、道外や石狩市外の道内市町村から、旅行や観光の一環としてサイクリングに訪れる方も多く、令和4年のゴールデンウィークに道の駅「あいロード厚田」で実施したアンケート

ト調査では、回答者の約8割が石狩市外から訪れた方でした。石狩市は車の交通量が少なく、信号も少ないという道路が多くあります。そうした道路は自転車でも走りやすいため、多くのサイクリストが市外から訪れます。加えてサイクリングコースを示す「矢羽根型路面表示」や主要な分岐点や休憩施設を導く「案内標識」を設置することにより、さらに安全で快適に走行できる環境を整備しています。



▲道の駅「あいロード厚田」

また、休憩場所に活用できるサイクリング拠点の整備にも力を入れていきます。カロリー消費の大きいサイクリングでは、適宜、休憩を取ることが大切です。そこで、サイクルラックを市内の4カ所に設置し、そのうち、道の駅「あいロード厚田」を含む3カ所に空気入れなどの工具を設置しました。こうした拠点の整備により、サイクリス



▲道の駅「あいロード厚田」に設置されたサイクルラック

トの休憩場所・交流場所が増え、サイクリスト同士の交流や地域住民との交流、さらに経済的な効果も生まれ、地域活性化に繋がっています。

物理的な自転車走行空間の整備にとどまらず、石狩市では、小、中学生を対象に、サイクリングガイドによる自転車の正しい乗り方やルールの啓発といった交通安全意識の醸成に取り組んでいます。サイクリングガイドによる安全教育を行うことで、交通ルールの徹底を図るとともに、自転車への興味を持つてもらい、次代の自転車文化を担う世代の意識啓発に取り組んでいます。

民間企業との連携

行政だけではなく、民間企業とも連携した取組を進めています。前述した株式会社サイクリングフロンティアの石塚代表とは、推進計画の策定以前からご協力いただいております。サイクリングガイドとしての目線から、推進計画の策定やサイクルルートの作成の監修をお願いしています。

また、サイクリングガイドを増やすことを目標に石塚代表を講師としてサイクリングガイドセミナーも実施しています。

近隣町村との連携

これまでは石狩市単独で、自転車を活用した地域活性化に取り組んできましたが、広域で連携することにより、山、海、川、建築物など、各自治体を持っている地域資源を活かして情報発信するために、当別町、増毛町、新篠津村と連携し、「石狩北部・増毛サイクルツーリズム推進協議会」を立ち上げました。

協議会では、広域のサイクルルートマップの作成などを行っています。近隣地域と連携することで、観光資源等それぞれの強みを活かした、より多様な魅力を含んだサイクルルートが完成しました。一つの市町村を訪れて終わ

りではなく、次は他の市町村にも訪れる人、リピーター（何度も訪れる人）が増えることによって、サイクリストたちに新たな立ち寄り先、旅行先として各市町村が認識され、周遊してもらうことを狙っています。

また、自転車という共通のテーマで近隣地域と連携することによって、同じ目線や意識を持った人が集まり、さらなるプロジェクトへと繋がっています。

「散走」気軽に散歩するように走る

今回、取材させていただいた石狩市のご担当者は、「『散走』というコンセプトがあります。気軽に、散歩するように走るといふ自転車の楽しみ方です。走ってみないとわからないことばかりですが、何事も、まずは気軽に、散歩するように走り出してみ、仲間を増やしていくことから始まり、同じ意識を持った人たちが集まれば、そこからプロジェクトが生まれていくと思います。」とお話くださいました。

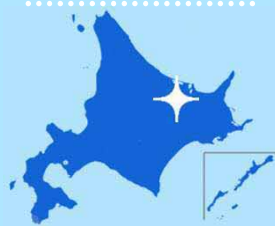
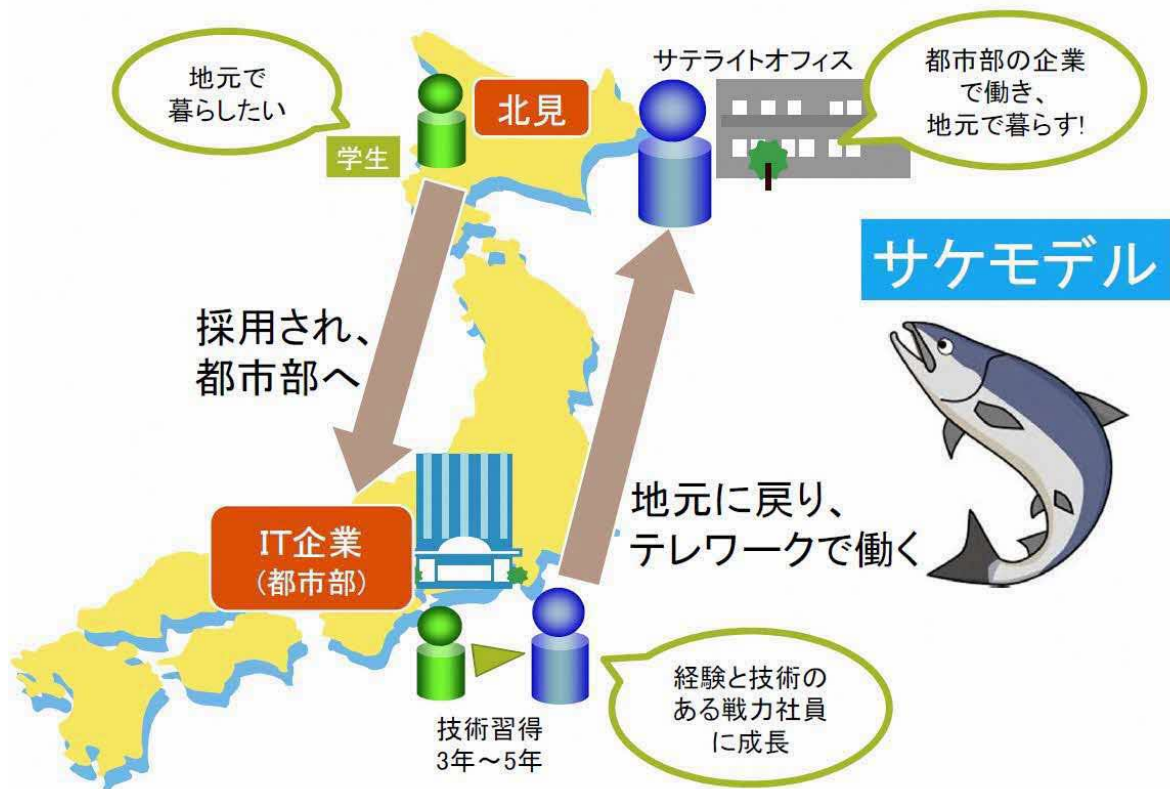
あらゆる世代の方が、気軽に自転車を楽しめるよう、その時々ニーズに的確に対応し、走りやすい環境を提供しつつけることで、更なる自転車文化の深まりに期待が掛かります。



▲サイクリングガイドを受けに多くのサイクリストが訪れる弁天歴史公園内に設置された観光案内所



▲お話を伺った石狩市企画経済部企画課上窪課長（右）と江島主査（左）



北見市

地元出身IT人材が帰ってくる場所

先端技術と大自然が混ざり合う

「オホーツクバレー」の実現を目指して



「サケモデル」

誕生の背景

北見市では以前から、地震や台風など自然災害が少なく、東京からのアクセスが良い立地環境などを活かし、日本最北端の国立大学である北見工業大学と連携したIT関連企業の誘致に取り組んできました。

北見工業大学では、毎年約400名の卒業生の多くが、大学で学んだスキルを生かせる仕事で北見市周辺には少ないと考え、首都圏へ流出してしまいます。この流れに歯止めをかけるため、北見に進出して地方の優秀な人材を確保したい首都圏のIT企業と、北見に残りたい地元志向の学生とのマッチングを試みてきました。その結果、北見工業大学の新卒者の採用には繋がったものの、北見事業所の運営に必要な即戦力となるIT人材の確保は難しく、早期の事業所開設には至りませんでした。

この課題の解決策を模索する中で、地元志向の学生が首都圏のIT企業に就職し、一度北見市を離れ首都圏等で技術と経験を身につけ、数年後に北見事業所を開設する際のスタートアップ

北見市は北海道の東部に位置する人口12万人のオホーツク圏最大の都市。面積は全道一、海の幸と山の幸が豊富に集まるオホーツクの台所。今回はICT環境を活用し、地元志向が強い北見工業大学の学生を東京の本社で育て、北見進出時のスタートアップ人材として地元に戻す人材帰郷モデル「サケモデル」について紹介します。

人材として、地元へ戻り活躍してもらうという人材帰郷型の進出モデルに行き着きました。

これを「大海原に出て成長し、生まれた川に戻ってくる鮭(サケ)」になぞらえ、「サケモデル」と呼ぶようになったのです。

サケモデルでの進出に向けて動き出すことで、企業は安定的に人材が確保できるほか、北見工業大学との共同研究により新たなビジネス開発が可能となりました。



ふるさとテレワーク推進事業

このサケモデルでのIT企業誘致をさらに促進するため、平成27年、総務省による地方創生施策「ふるさとテレワーク推進のための地域実証事業」に参加しました。首都圏のIT企業社員など延べ180名が北見市を訪れ、市内に設置したサテライトオフィスでテレワークを



▲ふるさとテレワーク推進事業では社員にとってのメリットが確認できた



▲商店街の空き店舗から始まったコワーキング施設

実証実験で得たつながりや経験をもとに、平成29年には地方創生関連の交付金を活用し、関係人口の増加と首都圏の「ひと」と「こと」の誘引による地域活性化を目指すことを目的に北見駅前を中心商店街の空き店舗を改装し、コワーキングスペース型のテレワーク拠点「サテライトオフィス北見」を整備しました。



テレワーク拠点の整備

行い、「地方においてもICT環境を活用することで、普段と変わらず仕事ができる」ことを実証することができました。実証事業をきっかけとして、ワーケーションのような観光と組み合わせられたテレワーク環境のPRをはじめ、夏休みや年末年始の帰省時に利用できるテレワーク体験などを実施し、関係人口創出のほか、UITターン移住者の増加につなげてきました。



市内外のテレワーカーが集う無二のコミュニティができている



◀遠隔地で仕事できれば、週末にリフレッシュが可能

オープン以来、地域内外のビジネスパーソンや移住者の勤務場所として活用される中で、業種を超えたコミュニティが形成されてきました。テレワークで北見市と繋がった首都圏の人たちが、地元企業と連携した商品開発や、市民向けのイベントを開催するなど、関係人口の創出が多様な広がりを見せています。さらに、令和4年春には、サテライトオフィス北見の拡充整備事業に対する補助を行い、進出企業による運営のもとで、名称も新たに「KITAMI BASE（キタミベース）」として、職住一体型テレワーク施設がリニューアルオープンしました。



「オホーツクバレー」ビジョン

「サケモデル」人材をはじめ、UITターン移住者の拠点としても活用されており、利用者同士が刺激しあうインベーシヨンの場となっています。現在、北見市では誘致するターゲットを「企業」から「企業に所属する社員個人」へシフトしてきており、今後もテレワークを活用した人材の集積に努めていきたいと考えています。

北見市は、IT企業・人材誘致を目指す上で「オホーツクバレー」というビジョンを掲げています。これは、豊かな大自然と先端技術を用いた研究やビジネスの機会が同居する、オホーツク地域ならではのIT都市を目指していきたいという思いを込めた造語です。サケモデルでのIT企業の誘致、そしてテレワークの推進に取り組んできた結果、北見工業大学・地元企業と進出企業とが連携し、北見発の独自製品開発に向けた共同研究などが展開されていきました。現在、道路の路面の凹凸を可視化するアプリケーションや、カーリングの技術力向上に向けた姿勢推計システムなど、様々な研究開発が進んでいます。今後、進出企業や移住者が北見工業大学、そして地元企業と連携することで「オホーツクならではのイノベーション」が生まれる、そんな理想的な環境づくりに注力していきます。

サケモデル 実践者の声

株式会社アイエンター

平田 洸介さん



私は北見市出身で、北見工業大学大学院を修了後「サケモデル」として東京の株式会社アイエンターに入社しました。ITエンジニアとして働く傍ら、カーリング選手としても活動し、平成30年には平昌冬季五輪に日本代表選手として出場しました。

オリンピック閉幕後、今度は地元からのオリンピック出場を目指し、北見市に戻りカーリングチームを結成しました。現在もテレワークを活用してKITAMI BASEで仕事をしながら、選手として結果を残すことを目標に、仲間と精力的に練習に励んでいます。

株式会社アイエンターは、北見工業大学と連携し、市内のカーリングホールでスポーツテック関連の研究開発を行っています。シートにセンサーやカメラを設置し、選手の投球姿勢やストロークの軌跡をデジタル解析するなど、他に類を見ない研究に取り組んでおり、エンジニアとして事業に関わりながら選手としてのスキルアップも図れる、非常に貴重な環境だと感じています。私自身が場所に縛られることなく夢を追い続けることができ、テレワークでの就業に可能性を感じています。

『なおみちカフェ』から

～地域創生のヒントを探る～



空知編

なおみちカフェ

鈴木知事が、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にその様子をお伝えします。

▲ 昭和11年に建設された木造二階建て校舎『雨煙別小学校』は平成10年3月に閉校。以来、校舎の保存・活用を求める地域住民の要望や意見交換がたびたび行われました。しかし、財政負担の課題から結論がでないまま10年近く放置され荒廃の一途をたどっていましたが、自然、環境教育と文化、スポーツの体験学習の宿泊研修施設にリノベーションされました。

令和4年4月26日訪問

うえんべつ

雨煙別小学校

コカ・コーラ環境ハウス編

今回まずご紹介するのは、栗山町の「ふるさと教育」の拠点施設である雨煙別小学校「コカ・コーラ環境ハウス」です。

本施設は、平成10年に廃校となった旧雨煙別小学校を公益財団法人「コカ・コーラ教育環境財団」の支援と、人口の約1割にあたる延べ1500人もの町民ボランティアの協力により、外壁の塗装や校舎内部、体育館の整備など、知恵や創意工夫、思いを集結して、平成22年に「雨煙別小学校 コカ・コーラ環境ハウス」として再生しました。

栗山町の豊かな自然環境プログラムを柱に、地域住民、NPO法人雨煙別学校、行政、財団、企業が協働して運営しています。

栗山町「ふるさと教育」

自然体験活動を中心に、地域の環境を活かした教育活動を推進し、身近な自然への関心を高め、地域の環境保全への意識やふるさとへの誇り、愛着に繋げる取組。

また、この施設は令和3年に『体験の機会』に認定された。この認定により、環境教育の質の高さを担保するとともに、安心して参加できる体験活動の機会の提供につながっています。

全国27カ所のうち、道内で認定されているのはこの雨煙別小学校「コカ・コーラ環境ハウス」のみとなっています。

次世代を担う人材の育成や地域の活性化に資する様々な事業が行われており、今や自然体験活動や環境教育の拠点として高い注目を浴び、全国から利用者が集まる施設となっています。

今後も豊かな自然資源を活用した教育活動の拠点の場として、さらなる発展の可能性を感じます。



※「体験の機会」とは

民間の土地・建物の所有者等が提供する自然体験活動等の体験の機会について、都道府県知事等が認定・周知する制度。認定にあたり、安全確保、実施体制に関する事が要件となっている。

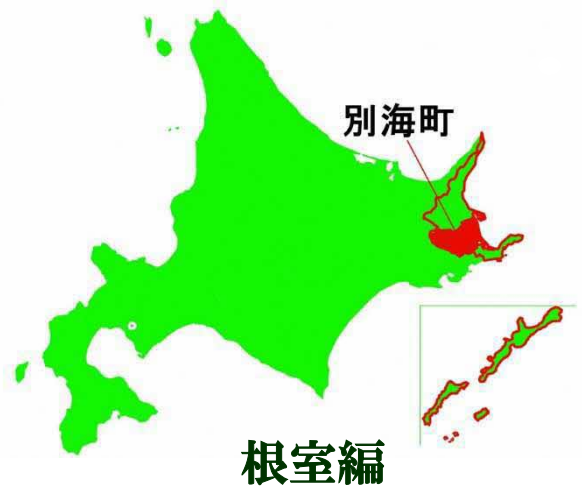
当日の 知事の言葉から

町民の皆さんがふるさとに誇りを持って、地域を学ぶ場にもなっていることは大変意義のあることだと思えます。

また、SDGsの観点からも、栗山町以外の方々がこの栗山町の施設で学ぶ意義も非常に大きいと思えますし、何よりこのような施設を大切に守ってこれた皆様の苦労と努力の積み重ねに、心から敬意を表します。



なおみちカフェ（栗山町編）の動画はこちらからご覧いただけます。
(YouTubeチャンネル)



関係機関を挙げた新規就農者の支援体制



若者を全国から受け入れ、研修から独立までをサポートする取組を行っています。

このような手厚い支援体制のもと、これまでに送り出された卒業生は79組にも上ります。そして、研修で学んだ知識や技能を活かし、各卒業生が現在、地域の酪農の第一線で活躍されています。就農後も関係機関が連携し営農指導と一体的な支援を行い、新規就農者の定着と地域の振興につなげています。



なおみちカフェ（別海町編）の動画はこちらからご覧いただけます。（YouTubeチャンネル）

令和4年5月12日訪問

有限会社 別海町酪農研修牧場 編

次にご紹介するのは、地域一丸となつて酪農の担い手を育成している別海町酪農研修牧場です。

研修期間は3年間で、酪農の基本的知識や実践的技術、経営能力を座学と実技で身につけます。

別海町の酪農産業は、担い手の高齢化や後継者不足により廃業が進んでいることから、町と町内の3つの農協が出資し平成8年12月に酪農研修牧場を開設しました。

また、研修生は有限会社別海町酪農研修牧場の「社員」でもあるため、研修手当として最大で月額17万円が支給されるほか、住宅の貸与（月額3万円）や牛舎内に保育室を設けるなど、生活に不安を感じることなく、研修に集中できる環境が整えられています。

酪農を始めたという気持ちがあっても、いきなりできるものではないので、このような支援体制が整っていることは非常に心強いことです。

また、地域が一丸となつて就農までのサポートにとどまらず、就農後のきめ細やかな支援を行っていることも、長年、就農希望者の皆様と向き合われてきた成果だと感じます。

当日の知事の言葉から



人と地域がつながるベストな場所が北海道にはある

つながる。HUBest

「つながる。ハーベスト」とは？
 「新しい働き方」として注目されているワークケーション。その魅力のひとつでもある、人と地域とのつながりを通じて新たな活動を生み出すことができるワーク施設と、そこでの出会いを創り出す「コンシエルジュをインタビュ形式で紹介します。」

第三弾 札幌市

SAPPORO Incubation Hub DRIVE

高輪 健人さん

(株式会社大人 コミュニティマネージャー)



を保ち、提供を公言している設備への自由度が無いことを指します。これは多くのワークキングスペースでも実施していることだと思っています。

2つめの「インキュベーション」は利用者へビジネス成長のきっかけを提供することです。具体的には、4月からスタートアップをサポートする新プランを始めたり、「北海道U-25起業家シェアハウス」とのコラボ、道内外のビジネス最前線の方を招いたトークイベントや、ビジネスパフォーマンスを最大化させるための朝ヨガや整体を開催しています。その他、様々なきつかけづくりを行っているので、ホームページをご覧くださいといううれしいです！

利用者からも「こういうことやりたいんだけど」と相談されることがあるかと思えます。その際には「コミュニティマネージャーの高輪さんがきつかけづくりをされるというわけですね。」

そうですね。全てに答えられる訳ではないですが(笑)私がハブになることはできるので、「DRIVE」の利用者同士はもちろん、東京に住んでいた頃の人脈や、他のワークキングスペースの利用者につながることもあります。

この施設の特徴や取組について教えてくださいいただけますでしょうか。
 DRIVEが利用者へ提供している価値は2つあります。「ホスピタリティ」と「インキュベーション」です。
 1つめの「ホスピタリティ」は、快適なオフィス環境の提供であり、常に清潔

つながる瞬間

初めて利用される方の3分の1が道外から来られますが、ふらっと寄っていたいて、「札幌に支社をつくりたいんだよね」とか「実はこういうアイデアがあるんだけど、誰かにつなげてくれない？」という相談が結構ありますね。

これは前職(「WeWorkジャパン」)の話になっていますが、大企業の新規事業部やマーケティング部だけがシエ

アオフィスを利用するケースもあり、大企業なので事業部長など上司の判断でシェアオフィスに行くことが決まり、「言われたからシェアオフィスに来た」という社員の中にはいらっしやいました。

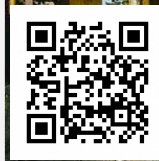
でも、その人たちも半年くらいたつと、「ワークキングスペースでの人の出会いから新たなプロジェクトが生まれることが分かったり、「こういう考え方があるのか、これできるじゃん！」とつながる瞬間があるので、そういった場を札幌でもつくりたいと思います。

これから「DRIVE」に来られる方にメッセージをお願いします。

北海道は、今メチャクチャ面白くなっています。興味を持った仲間が集まり、一緒に面白いことを作っていくフェーズだと思っています。北海道自体がベンチャー・スタートアップの一つとして頑張っているの、完成された場所であってなく、作り上げていくフェーズで関わりたいと思っていますので、是非一緒にやりましょう。仲間募集しています！



(DRIVE ホームページ) <https://sih-d.jp/>



第四弾 津別町

コワーキングスペースJIMBA

立川 彰さん

(株式会社道東テレビ代表取締役)



椅子は東京オリンピックのメダルケースを作った町内の「山上木工」の椅子を使用しています。ここには「道東テレビ」の事務所もあり、モニターや配信機材を揃えているので、生配信もできます。

——人や地域とつながれるのが「コワーキングスペースの魅力ですが、ここに来ると、津別の方々とどのようにつながれるか教えてください。」

毎週金曜日に「JIMBAR」という週替わりマスターによるバーをやっています。地元の野菜などを使って、町内の料理自慢の人が腕を振るうのですが、その日のマスターや他のお客さんとも交流してもらえます。

「ここと同じくリノベーションプロジェクトで空き家を活用して建てられたゲストハウス「nanoranno」が近くにあるので、金曜日は津別にきて泊まって夜は「JIMBAR」で町の人から情報収集してもらい、土日に行く場所を決めていただくという流れをつくりたいです。

JIMBAの強み

——この施設はどのような方に利用していただきたいとお考えでしょうか。

起業したい人や地方で働くことがどんなことか体験してみたい人たちですね。まずは、この人たちがどんな暮らしをしているか知ってもらうためにも、津別町に来てもらえたら凄くうれしいです。何なら「JIMBAR」のマスターを体験したい人でも全然OKです(笑)

あと、起業される方は、必ずプロモーションを考えるタイミングがあると思います。そんな時に、うちは映像もつくれるのが強みです。

起業する人にとっては、コワーキングスペースを使ってもらうだけでなく、情報発信もセットで出来るし、我々道東テレビにとっては、映像の仕事づくりにもつながるといって観点で、機会創出を目的にこの施設を運営しているところがあります。

——最後に、このインタビューを見て、JIMBAに来られる方々にメッセージをお願いします。

地方で何かやりたいと思う人は来てもらって、実際に人と触れあってみようこと、雰囲気がかめるのではないかと思えます。空き家の数などを含めて、津別町は「余白」が多いので、何かやりたいことが

ある人は実現できる環境といえます。私はキャンピングカー、中継車、キッチンカーを購入したのですが、都合がたつたら駐車場がネックになったりするじゃないですか。でも、ここは駐車場もいっぱいあるし、そういった意味でやりたいことを実現しやすい場所かもしれないと思っています。大自然の中で働きたいとか、夢がある方は是非とも来ていただいて、仲間になってもらえればうれしいですね。

このインタビュー記事は、誌面の都合により抜粋版を掲載しています。インタビュー全文については、北海道公式HPにて公開していますので、是非ご覧ください。



インタビュー全文はHPをCheck!



(JIMBA ホームページ) www.facebook.com/jimba19



該当する施設を月1回程度、HPでご紹介!

「つながる。ハーベスト」対象施設

- テレワークができる施設
- 地域を知るコンシェルジュがいる施設
- 誰もが気軽に利用できる施設
- 地域住民も利用している施設

どさんこ交流テラス

有楽町駅前

東京交通会館8階

「北海道に住んでみたい」「暮らしてみたい」の相談窓口

北海道庁では、北海道への移住を考えている方や、北海道での暮らしに関心をお持ちの方からのさまざまなお問い合わせ・ご相談に対応する窓口として、東京有楽町駅前、東京交通会館8階に「どさんこ交流テラス」を開設しています。

北海道の市町村情報をはじめ、「しごと」、「住まい」、「暮らし」などに関する情報提供とともに、ご相談にお答えします。
ぜひ、お気軽にお問い合わせください！

北海道への移住相談に相談員が対応！



○どさんこ交流テラスでは、専属の相談員があなたのお話を伺います。
北海道の冬の暮らしや興味のある地域の情報など、あなたの悩みに親切にねいに対応し、移住の実現をサポート！

北海道の暮らし情報が盛りだくさん！



○道内各市町村の情報や「しごと」などに関するパンフレットを多数取りそろえています。

○北海道の情報が入手できる移住関連イベントの情報も、随時お知らせしています。

相談は、対面(要予約)、電話、メールのほかオンライン(要予約)でも行っています！

◎ どさんこ交流テラス (北海道ふるさと移住定住推進センター(東京))

場所：東京交通会館8階
(東京都千代田区有楽町2丁目10番1号)
開設時間：火曜日～日曜日 10:00～18:00
(月・祝日、夏期休暇、年末年始は休業)
お問い合わせ
TEL：090-1541-0011
E-mail：hokkaido1@furusatokaiki.net



どさんこ交流テラスでお待ちしています！

北海道でも相談を受け付けています！

◎ 北海道ふるさと移住定住推進センター(札幌)
場所：北海道庁4階(札幌市中央区北3条西6丁目)
開設時間：月曜日～金曜日 8:45～17:30
土曜日・日曜日 事前予約により適宜対応
(祝日、年末年始は休業)
お問い合わせ
TEL：011-204-5089
E-mail：hokkaido.iju@pref.hokkaido.lg.jp



オンライン相談の受付はこちらのQRコードから！



「創る」バックナンバーは、「ほっかいどう応援団会議ポータルサイト」へ

QRコード読取で
バックナンバーへ

ほっかいどう応援団会議

検索

URL：https://hkd-ouendankaigi.jp/info/tukuru.html